

# 佐保川のほとり

## ——坂上郎女の見た風景——

### 影 山 尚 之

#### 一 坂上郎女と坂上の里

卷四所収の、藤原麻呂と大伴坂上郎女との間に交わされたらしい一連をとりあげる。

京職藤原大夫贈大伴郎女歌三首 卿諱曰麻呂

娘子らが玉くしげなる玉櫛の神さびけむも妹に逢はずあれば

(4・五二二)

よく渡る人は年にもありといふをいつの間にそも我が恋ひにける

(4・五二三)

蒸し衾なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

(4・五二四)

大伴郎女和歌四首

佐保川の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか

(4・五二五)

千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もなし我が恋ふらくは

(4・五二六)

来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを

(4・五二七)

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば

(4・五二八)

右郎女者佐保大納言卿之女也 初嫁一品穂積皇子 被寵

無儀而皇子薨之後時藤原麻呂大夫嫡之郎女焉 郎女家於

坂上里 仍族氏号曰坂上郎女也

又大伴坂上郎女歌一首

佐保川の岸のつかさの柴な刈りそねありつつも春し来らば立ち  
隠るがね

(4・五二九)

五二八歌左注は坂上郎女の人生復原の資料に活用されてきた。大宝元年とも文武三年ともいわれる郎女の生誕年は、右に基づき最初の結婚相手・穂積親王が薨去した霊亀元年七月を起点として算出されたものである。もともと、親王のこの上ない寵を被りその薨去の後に藤原の貴公子から求婚を受けた、とはまるでドラマのような展開だ。その求婚が仮に事実だったとして、霊亀元年以後のいつのことなのかは判然としないが、<sup>(1)</sup>小稿はその追究を課題としない。むしろ注意したいのは「坂上里」に居住していたという情報である。こことさらにここに記されるところを見ると、単なる当事者の通称の由来説明ではなくて、右の贈答の現場が坂上里であったという理解を説

者に求めていると受け取るべきだろう。その情報が贈答歌解析の必須要件になると予想されるのである。

坂上里の位置については、吉田東伍『大日本地名辞書』に「歌姫の古名」とするなどいくつかの臆説があったが、ここでは広く行われている三説を瞥見するにとどめる。

1 生駒郡三郷村（現生駒郡三郷町）坂上（さかね）

2 「平城坂の上」、奈良市法華寺町西北・平城坂上陵（磐之媛命陵）付近（3）

3 奈良市三条通油阪・春日率川坂上陵（開化天皇陵）付近（4）

1は近代に残る地名を根拠とし、2・3は延喜式記載の陵墓の称に拠る推定である。それ以外に客観的かつ有力な傍証を得ることはむずかしく、万葉集の歌文および題詞左注の読解に判断を委ねるしかない。たとえば澤瀉久孝『萬葉集注釈』（3・三七九題への注）は、

駿河麻呂が坂上家の二嬢に贈る作（四〇七）に「春日里」の語があるのと巻四（七二五）の坂上郎女の作の題詞の注に「在春日里作」とあるのを見合はせると、大伴家の佐保の本宅（四六〇）の他に春日に郎女の宅があつたと見た方がよささうである。

と記して2・3両説を挙げ、「その推定によるべきだと思う」とした。もつとも、これでは1説を退けたことはわかるものの、2・3説のどちらに賛同しているのか不明である。近時の注釈書のうちでは2説を採るものがやや多いが、3説を支持する向きもあつて定説を見ない。

A 大伴宿祢駿河麻呂甥同坂上家之二嬢歌一首

春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし柄はさしにけむ

（3・四〇七）

B

七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去作歌一首并短歌

栲づのの新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして 問ひ放く  
る 親族兄弟 なき国に 渡り来まして 大君の 敷きます  
国に うちひさす 都しみみに 里家は さはにあれども  
いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣  
く子なす 慕ひ来まして したへの 家をも造り あらた  
まの 年の緒長く 住まひつつ いまししものを 生ける人  
死ぬといふことに 免れぬ ものにしあれば 頼めりし 人  
のことごと 草枕 旅なる間に 佐保川を 朝川渡り 春日  
野を そがひに見つつ あしひきの山辺をさして 夕闇と隠  
りましぬれ 言はむすべ せむすべ知らに たもとほり た  
だひとりして 白たへの 衣手干さず 嘆きつつ 我が泣く  
涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りきや （3・四六〇）

反歌

留め得ぬ命にしあればしたへの家ゆは出でて雲隠りにき

（3・四六一）

右新羅國尼名曰理願也 遠感王德歸化聖朝 於時寄住  
大納言大將軍大伴卿家既遷數紀焉 惟以天平七年乙亥  
忽沈運病既趣泉界 於是大家石川命婦依餌藥事件有間  
温泉而不曾此喪 但郎女獨留葬送屍柩既訖 仍作此歌  
贈入温泉

C

獻 天皇歌二首 大伴坂上郎女在春日里作也

には鳥の潜く池水心あらば君に我が恋ふる心示さね

（4・七二五）

『注釈』が参照したのは右の三件、ほかに次の諸例が検討されるべきであらう。

D 大伴坂上郎女歌一首

世の常に聞けば苦しき呼子鳥声なつかしき時にはなりぬ

(8・四四七)

右一首天平四年三月一日佐保宅作

E 獻 天皇歌一首 大伴坂上郎女在佐保宅作也

あしひきの山にし居れば風流なみ我がするわざをとがめたまふな

(4・七二二)

F 大伴坂上郎女与姪家持從佐保還歸西宅歌一首

我が背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで

(6・九九九)

G 大伴田村家之大嬢贈妹坂上大嬢歌四首

よそに居て恋ふれば苦し我妹子を継ぎて相見む事計りせよ

(4・七五六)

遠くあればわびてもあるを里近くありと聞きつつ見ぬがすべなき

(4・七五七)

白雲のたなびく山の高々に我が思ふ妹を見むよしもがも

(4・七五八)

いかならむ時にか妹をむぐらふの汚なきやどに入れいませてむ

(4・七五九)

右田村大嬢坂上大嬢並是右大辨大伴宿奈麻呂卿之女也

卿居田村里 号曰田村大嬢 但妹坂上大嬢者母居坂上里

仍曰坂上大嬢 于時姉妹諮問以歌贈答

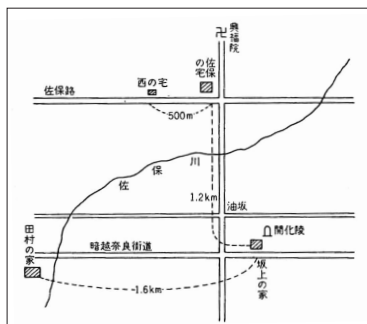
以上から知られるのは、「坂上家」つまり「坂上里」が「春日里」

と言っても抵抗のない地点にあり(A・C)、郎女の父・大伴安麻呂が暮らす大伴氏邸宅は佐保、そのうちでも「山辺」と見なしうるところで(B)、おそらくは旅人の薨去(天平三年)を契機として坂上郎女がそこに逗留することもあり(B・D・E)、それとは別に「西宅」と呼ばれる邸を大伴氏は保有していて(F)、しかしそこは「着る衣薄」い装いで往き来できるほどに本邸と近距離の位置にあるということ。さらに坂上大嬢の姉の住む「田村家」が「田村里」に所在し、そこと「坂上家」とは「遠く」なくて「里近く」に営まれていること(G)、である。尼理願の埋葬に係る叙述「佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ あしひきの 山辺を さして 夕闇と 隠りましぬれ」は、歌の表現である点を割り引く必要があるとしても、佐保大伴本邸の位置を推測する有力な材料となる。「山辺」は佐保山を指すと見てよからう。

これら大伴氏関係の邸を総合的に考察した論が川口常孝氏にある。<sup>(5)</sup>「坂上里」の位置につき3説を是とする川口論は、その重要な根拠の一つとして田村里の所在を、今日にも残る地名「田村川」<sup>(6)</sup>と、『東大寺要録』巻六「諸国諸庄田地(長徳四年注文定)」の記録「平城田村地二町四段卅八歩／四條二坊十二坪一町二段百廿四歩／五條二坊九坪一町二段百廿四歩」とによって左京四條二坊、五條二坊の周辺、「関西電力奈良変電所と暗峠奈良街道をはさんだ反対側一帯の地」に比定し、そこは「開化天皇陵とは文字通り一直線(東西)につながり、両者間の距離は一・六キロメートルほどと近く、Gが与える情報に適合するといふ。<sup>(7)</sup> 次頁は同論に掲げる関係地図である。



開化天皇陵（筆者撮影、以下同）



川口氏著による関係図

開化天皇陵の位置は近鉄奈良駅とJR奈良駅のほぼ中間、春日の地を西にやや外れるものの広くそこに含めるとしても無理はないし、奈良市役所のある大宮町あたりから東に向かって登り坂が続くので、「坂上」の地名には相応しい。大伴氏本邸・佐保宅と西宅を図のように想定する川口論によれば、大伴氏関係の諸邸はなるほど相互に遠からぬ位置にあつて、頻繁な往来が可能に見える。ちなみに川口論は上掲諸歌のほかになおいくつかの家持関係歌を利用して考察を加え、大伴家佐保宅は「奈良京東北辺の一地点」、佐保のなかでも山寄りの、佐保川の北側の地区に求められるとし、具体的には「もとの奈良県立高等学校周辺地域」、「現在、その敷地には、公立学校共済組合の福祉施設である奈良宿泊所・春日野荘が立っている」周辺であろうという。「春日野荘」はいまは「リガール春日野」と名称を変えている。また、「西宅」については、それこそが大伴氏本邸であろうと見たり、坂上家が該当するとしていたりする説が行わ

れていたのを批判して、具体的な地点の特定にまでは及ばないものの「佐保道に面して」「佐保町あたりにあったと考えたい」とし、佐保大伴宅と西宅との関係については、平城京条坊内に存在する「西宅」が奈良遷都以来の大伴家本邸であり、やがて諸般の事情により「外京北郊地に第二天伴邸を営むに至つて」、それが新たな本邸＝佐保大伴宅に改まったものと推測する。Fの題詞に看取される事情を同論は次のように説く。

家持がそこ（奈良遷都当初の大伴家の本邸―影山注）へ「還」っていったのは、この歌のころ、家持がそこに住んでいたからで、旅人亡き後、郎女が大伴家の家刀自として本邸をとりしきり、やがて宗家の主人となるべき家持は、旧本邸たる西の宅で一家経営の見習の期間をすこしていたのである。

裏付けとなる文字資料の検出がない段階では一定の留保を付さねばならないが、関係諸歌との整合性が確保された推論であるという点において、いまは右に蓋然性を認めたい。



転害門



佐保川（法蓮橋）

## 二 藤原麻呂の妻問いと佐保川

藤原麻呂の住まいについては、いわゆる「二条大路木簡」のうち「中宮職移兵部省卿宅政所」と頭書された木簡（平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構北出土）の解説によつて左京二条二坊五坪を含む地点に存在したことがほぼ明らかになった。<sup>(10)</sup>後に法華寺として継承される藤原不比等邸（左京二条二坊九・十・十五・十六坪）の南に接するところである。佐保川の流路が往時から現在まで変更されていないはずはないが、麻呂邸が流域の西北に所在することは認めてよいだろう。坂上里に居住する郎女のもとに妻問うには、だから、佐保川を越えてくることになる。これによつて贈答歌の表現と現実の居住地域とが矛盾なく結び付く。

天平勝宝八歳「東大寺山堺四至図」には転害門を「佐保路門」と記し、そこから法華寺に至る一条南大路を「佐保路」とも呼んで、その南北・佐保に貴顕らの広大な邸宅が営まれたことは周知である。前掲川口論はいますこし限定して「聖武天皇陵・光明皇后陵・興福院、不退寺を結ぶ線の南側が、当時の住宅地であつたと考えてよさそうである」<sup>(11)</sup>と述べ、南限は佐保川の水流である」とし、その範囲が「哀傷長逝之弟歌一首」に、

…逆言の 狂言とかも はしきよし 汝弟の命 なにしかも  
時しはあらむを はだすすき 穂に出づる秋の 萩の花 には  
へるやとを 朝廷に 出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず 佐  
保の内の 里を行き過ぎ あしひきの 山の木末に 白雲に  
立ちたなびくと 我に告げつる（17・三九五八）  
とうたわれる「佐保の内」に相当するのだという。麻呂の邸はもち

ろん「佐保の内」にあり、坂上里は佐保を南に外れることになる。

春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰呼子鳥

（10・一八二七）

我が門に守る田を見れば佐保の内の秋萩すき思ほゆるかも

（10・二二二二）

そこが人々の憧憬を集める特権的地域であることは右を見るだけでも推察できる。

さて、贈答歌群中の郎女歌は四首のうち三首に佐保川を詠みこみ、「又大伴坂上郎女歌」の題で付加される一首にも佐保川は詠まれて、その執着は異様な印象をすら与える。すなわち、五二五歌には麻呂の乗る黒馬が佐保川の小石を踏み渡つて一年中こちらに通つてほしいという願望が託され、五二六歌は千鳥の鳴く佐保川の瀬に立つ小波のように恋心のやむ間がないと訴えて、五二八歌では佐保川の広い瀬に内橋を渡して麻呂の通いを期待するとうたう。五二九歌はそれまでの一連とは時を異にするのだろうか、春になったらそこに立ち隠れるのだから佐保川の岸の高所の草を刈るな、となにやら意味深長なことを告げている。

万葉集中に佐保川をうたう例は十七首（「佐保の川」「佐保の川門」など含む）だから、その四分の一弱を一連の歌群で消費していることになる。ただし、贈答でありながら佐保川を話題にするのは一人郎女だけで、麻呂作歌にはそれがまったく詠まれない。これもまた読者に違和感を抱かせる要因だ。その異常性に着目してか、関本みや子氏は当該贈答歌群の背景に「川辺で男神のおとずれを待つ聖なる女のイメージが顕著である」とし、<sup>(12)</sup>郎女がしきりに佐保川をうたうことについて、

自らゆかりの地を舞台に神を待つ女——佐保のヒメとでもいうようなものに自らを見立てる趣向があつた

と論じた。この物言いは的外れだが、

本贈答歌の裏の部分には、幾重にも重なった障害を含む恋歌設定が隠されていると理解できる。

と述べて、川辺に焦点を絞る郎女の表現選択に逢瀬の障害の演出への志向があるとする点は首肯してよい。

すでに多くの指摘があるとおり、卷十三所収歌と七夕歌とが当事者の共通理解として前提されているらしい。踏まえられる卷十三の歌は、

年渡るまでも人はありといふをいつの間にも我が恋ひにける

(13・三二六四)

川の瀬の石踏み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常にあらぬかも

(13・三三二三)

とあつて麻呂贈歌先頭と郎女和歌先頭とが右を介して照応するしくみのように映る。伊藤博氏『萬葉集釈注』に、

五二三が13三二六四に類歌を持てば、これ(五二五歌—影山注)

は、13三三一一に類歌を持つ。古歌をお踏まえのほど、知つてますよという信号でもある。

の解説がある。一方、七夕歌については、

年[に]ありて今かまくらむぬばたまの夜霧隠れる遠妻の手を

(10・二〇三五)

年の恋今夜尽くして明日よりは常のごとくや我が恋ひ居らむ

(10・二〇三七)

天の川打橋渡せ妹が家道止まず通はむ待たずとも

(10・二〇五六)

機の踏み木持ち行きて天の川打橋渡す君が来むため

(10・二〇六二)

などに当該歌群との接点が明瞭だ。こうしたありようは両者の贈答が文芸的遊戯的次元にあることを思わせ、表明される心情や行為が切実なそれではなくて誇張と解するべきことが示唆される。どうやら当事者を牽牛織女に見立てる趣向が意図されているようで、郎女によつては佐保川がふたつの星を厳しく立てる天の川にも見立てられているのである。その点を真下厚氏は、

当該歌は贈歌第二首の、天上の天の川をはさむ二星の恋をわが身に引きつけ、地上の佐保川をはさむ恋としてうたい変える。

ただ、その際、流布した先の歌を単に利用したのではない。これを踏まえて、七夕の〈舟での訪れ〉というモチーフを対比的な〈馬での訪れ〉のモチーフとしてうたい変えたとみられる。

と説いた。いったい、この歌群は贈歌と答歌とが緊密には対応していない。五二三歌と五二五歌との切り結ぶ呼吸が真下論の言うとお

りであれば、七夕の話題は継承されていても、麻呂の恋情を郎女は受け止めておらず、むしろはぐらかしている格好である。

神堀忍氏前掲論文は五二八歌を麻呂歌に対する「軽い応酬」と把握し、「瀬を広み」の表現に即して、

馬を持ちながら通い来ぬ相手に「なにしろ佐保川は渡り瀬が広いですものね」と、麻呂の来訪を熱望するどころか、そこにむしろ揶揄の口つきをささ思ふのである。

と述べた。これとあわせて前掲「釈注」が郎女歌に「足遠い相手に



対する皮肉」を読み取ったのは誤つてまい。同書は五二八歌に対して次のように言い及ぶ。

結句の「汝」は、女の男に対する言葉としては異例。これは、「汝が来と思へば」に「長くと思へば」（二人の仲が長く続いてほしいと思うものだから）の意をかけながら、なかなかそうはいかないでしょうけどと、からかいをこめたものである。

典拠としての卷十三古歌にせよ七夕歌にせよ、麻呂から持ち出した趣向に対して郎女が転換的に、また執拗にそれを引き受けているところには、たしかに皮肉や揶揄にも解せる意図的な屈折があるのだろう。麻呂の恋情の訴えに耳を傾けることなく一方的に自身の「待つ」姿勢ばかりを語り続ける点も同じく屈折と受け止められる。

女性から男性に対して「汝」の語を選択する異例は江富範子氏が的確に指摘している。

坂上郎女が五二八番歌で敢えて「汝」を用いたのは、麻呂に対して過度の親しみを示して見せたのであろうが、もとより、それは二人の実際の間柄とは程遠いし、彼女の階層には似つかわしくない言葉遣いでもあったろう。佐保川に「打橋」を渡すという内容と相俟って、殊更田舎めいた女のふりをしてふざけて見せたのではないか。

郎女和歌に諧謔性が一貫することはこれらの論により明白になった。

関本氏が指摘した「障害」は、それを対話の趣向のレベルに理解してよければ、右諸論の指摘する皮肉・諧謔とじつは矛盾しない。郎女は、佐保川の対岸に居住する麻呂に対して、素直でない感情を向かわせているようである。もちろん転換や反発は贈答歌に常套的な手法であり、歪んだ感情の表出がさまざま特別な事情の反映を意

味するものではないけれども、郎女だけが繰り返し佐保川をうたう異常性はそこに起因するのではないだろうか。

#### 付 田園調布と六麓荘

凡俗の性か、平城京貴顕の住宅地「佐保」から稿者はつい現代の高級住宅地田園調布を思い起こしてしまふ。インターネットにより今年（平成28年）の平均地価を調べてみると次のとおりだった。

平均 六二万五〇八三円（平方メートルあたり）

前年比プラス二・四七％上昇

坪単価 二〇六万六三九一元

仮に二〇坪の土地を購入するとしたら四一二〇万円を準備しなければならぬのだから、出るのは溜息ばかり。

しかし関西在住者にとっては東京の田園調布よりもまず思いうかぶ超高級住宅地がある。芦屋市六麓荘町である。同地域の今年の平均地価は、

平均 二〇万三〇〇〇円（平方メートルあたり）

前年比プラス一・五〇％上昇

坪単価 六七万一〇七四円

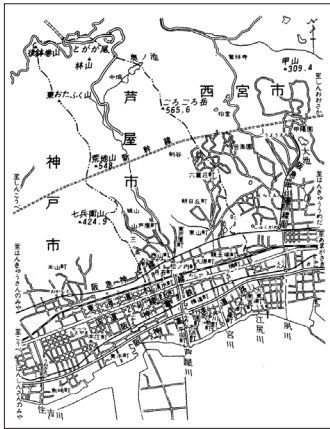
だという。この数字は一見田園調布の足元にも及ばないかののごとくだが、ここはすこしばかり特殊な住宅地だ。建築条例によって一戸の敷地面積を四〇〇平方メートル（一二一坪）以上と定め、二階建以下の一戸建個人専用住宅しか建築することが許されない。つまり、坪単価が六七万円でも一二一坪以上が建築の条件になると、一戸あたり土地だけで八一〇七万円に達してしまうのである。建物の高さ

は一〇メートルを越えてはならず、軒の高さは七メートル以下と決められるなどさまざまな制限があり、マンションはもとより商業施設も一切建設を認めていない。左は『兵庫県大百科事典』（神戸新聞出版センター、昭和58年）による「六麓荘」に関する説明である。



六麓荘交差点

芦屋市北部にある町名。背後の六甲山の芦屋断層の前面の高さ二〇〇、二五〇mの山麓台地上にある高級住宅地。昭和三年（一九二八）、「株式会社六麓荘」を設立。国有林の払い下げを受けて造成したもの。香港の外人専用住宅地に模して計画され、電線、ガス管、電話線等を埋設し、各区画の屈曲部に各家の玄関が位置するようにと細部にわたる基準が設けられた。一戸当たりの宅地面積は平均約一二〇〇㎡もあり、小川・林地・池等の自然環境を生かし、独自の水源地を持つ等、住民による町づくりが進められた。町名六麓荘は六甲山麓の町の意味。…（下略）



芦屋周辺図（人文社『郷土資料事典 兵庫県・観光と旅』による）

あり、小川・林地・池等の自然環境を生かし、独自の水源地を持つ等、住民による町づくりが進められた。町名六麓荘は六甲山麓の町の意味。…（下略）

### 三 佐保川のほとり

六麓荘のある芦屋市には東西に三つの電車が走る。南から阪神電車、JR、そして阪急電車である。芦屋に限らず阪神間では阪急沿線に高級感を認めることがあるが、六麓荘は阪急芦屋駅からさらに北側の山手に所在する。傾斜地ゆえ交通の便は良好とは言いがたいものの、一戸あたり複数台の——しばしば外国産の自家用車をあたりまえに保有している状況では、住民に不便の実感が抱かれようもないだろう。

万葉の佐保川は、いわば芦屋における阪急線にも似た境界の機能を担う。川の北に貴顕らが構える邸宅は、三位以上で四町占地六七〇〇平方メートルというから、地価をどれほど低く見積もっても今なら数十億円を越える桁外れの屋敷街である。

前掲江富論文は郎女五二五歌について「佐保川を舞台に、貴人を迎える身分低い女に擬装して歌っている」と把握した。言うとおりだとすると、それは佐保の住人・麻呂に対する謙りであり、佐保川の南・坂上里に住む自身との差別を自覚した劣等感の表明ということになる。もちろんそれも趣向として、である。

郎女歌は麻呂の乗る馬を「黒馬」と決めつける。当該歌の背景にある巻十三所収歌に、

川の瀬の石踏み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常にあらぬかも

（13・三三二）

とあるのをほぼそのまま写した格好ではあるが、「黒馬」はほかに、里人の 我に告ぐらく 汝が恋ふる うるはし夫は もみち葉の 散りまがひたる 神奈備の この山辺から 或本に云ふ「そ



の山辺」ぬばたまの 黒馬に乗りて 川の瀬を 七瀬渡りて

うらぶれて 夫は逢ひきと 人ぞ告げつる (13・三三〇三)

の例が見え、いずれも川の瀬を渡る行為がうたわれる。類似する「黒駒」の語にしても、

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒

(7・二二七)

赤駒を 厩に立て 黒駒を 厩に立てて それを飼ひ 我が行く

ごとく 思ひ妻 心に乗りて 高山の 峰のたをりに 射目立て

て 鹿猪待つごとく 床敷きて 我が待つ君を 犬吠えそね

(13・三二七八)

とあって、前者は「妹が家」まで遠い距離を高速で疾走する馬、後者は馬寮に飼育される官馬が想定されるのでどれも平凡な馬ではなく、川ならばいくつもの瀬をたやすく越えてゆけるほどの屈強の駿馬であると知られる。かような馬に日常生活空間内で騎乗しているというのは、ひとつは乗り手の社会的地位の高さを暗示するであろうし、いまひとつは、佐保川を渡ることの困難さを強調することにもなる。たかが妻問いごときにたいそうな川渡りである。

七夕歌を踏まえたことで、当該贈答歌群は佐保川を天の川に擬える次第となった。当時は舟の行き来があるほどに広い川幅を備えていたというが、そうはいっても大和盆地の小河川を天上の二星の逢瀬を阻む大河に見立てるといふのは著しい誇張だ。しかしながら、佐保川を挟む南北に顕在化する差別感、つまり人びとに社会的身分の差を痛感させずにおかない厳しい懸隔が介在していて、それがかかる誇張を受け入れる地盤だったといえるだろう。

恋人のもとに通うのに川を渡るのは、

梯立の倉椅川の石の橋はも 男盛りに我が渡してし石の橋はも

(7・二二八三)

明日香川明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも

(11・二七〇二)

などを見ると普遍的な発想のように思えるが、佐保川を詠む十七首のうちで佐保川を渡る妻問いを話題にするのは郎女歌以外には家持の一首しかなく、その家持歌は五二八歌に重なるところが顕著だから、郎女歌の影響下にあると見通される。

ここで佐保川を詠んだ歌を検討しておかなければなるまい。左は先掲郎女四首を除く十三件である。

或本従藤原京遷于寧樂宮時歌

①大君の 命恐み にきびにし 家を置き…(中略)… あをに

よし 奈良の都の 佐保川に い行き至りて 我が寝たる 衣

の上ゆ 朝月夜 さやかに見れば…(下略) (1・七九 雑歌)

出雲守門部王思京歌一首

②飮宇の海の河原の千鳥 汝が鳴けば我が佐保川の思ほゆらくに

(3・三七一 雑歌)

七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去作歌一首

③栲づの 新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして 問ひ放くる

親族兄弟 なき国に 渡り来まして…(中略)… 頼めりし

人のことごと 草枕 旅なる間に 佐保川を 朝川渡り 春日

野を そがひに見つつ あしひきの 山辺をさして 夕闇と

隠りましぬれ…(下略) (3・四六〇 挽歌〈前掲〉)

大伴宿祢家持贈娘子歌七首（のうち）

④ 千鳥 鳴く佐保の川門の清き瀬を馬打ち渡しいつか通はむ

（4・七一五 相聞）

四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌一首

⑤ 〔前略〕：かけまくも あやに恐く 言はまくも ゆゆしく

あらむと あらかじめ かねて知りせば 千鳥 鳴く その佐

保川に 岩に生ふる 菅の根取りて しのお草 祓へてましを

行く水に みそぎてましを：（下略）（6・九四八 雜歌）

桜作村主益人歌一首

⑥ 思ほえず来ましし君を佐保川のかはづ聞かせず帰しつるかも

（6・二〇〇 四 雜歌）

右内匠大属桜作村主益人聊設飲饌以饗長官佐為王 未

及日斜王既還歸 於時益人怜惜不厭之歸仍作此歌

⑦ 佐保川の清き川原に鳴く 千鳥 かはづと二つ忘れかねつも

（7・一一二三 詠鳥）

⑧ 佐保川にさをどる 千鳥 夜くたちて汝が声聞けば寝ねかてなくに

（7・一一二四 詠鳥）

⑨ 佐保川に鳴くなる 千鳥 なにしかも川原をしのひいや川上る

（7・一二五一 問答）

大伴坂上郎女柳歌二首（のうち）

⑩ うち上る佐保の川原の青柳は今春へとなりにけるかも

（8・一四三三 春雜歌）

尼作頭句并大伴宿祢家持所詠尼續末句等和歌一首

⑪ 佐保川の水を堰き上げて植えし田を 尼作 刈れる初飯は一人な

るべし 家持繼

（8・一六三五 秋相聞）

⑫ 佐保川の川波立たず静けくも君にたぐひて明日さへもがも

（12・三〇一〇 寄物陳思）

大原櫻井真人行佐保川邊之時作歌一首

⑬ 佐保川に凍り渡れる薄ら氷の薄き心を我が思はるに

（20・四四七八）

前記のとおり佐保川を渡って恋人のもとに向かうさまをうたうのは

④家持歌の一例のみ、これを評して木下正俊氏『萬葉集全注卷第

四』は、

むしろ坂上郎女の「佐保川の小石踏み渡り」（五二五）、「千鳥

鳴く佐保の川瀬の」（五二六）、「千鳥鳴く佐保の河門の」（五二八）

の用語や歌境を借り来って作った興味優先の作ではなからう

か。

と言ひ、同じく郎女作歌の踏襲を指摘する注釈書は少なくない。相

聞歌巻に分類される例はほかに⑪⑫を見出す程度で、それらも佐保

川を渡ることがないから、郎女歌の際立ちが改めて実感できよう。

③は「佐保川を朝川渡り」とうたうものの、これは葬送の道行きで

ある。同じく道行き文中に見える①、禊ぎの現場として取りあげる

⑤を特殊な例として除外するなら、残りの大部分が佐保川を心惹か

れる環境として賞美する発想の歌であるとわかる。「千鳥」を特徴

的景物とする認知がすでに固定しており（②④⑤⑦⑧⑨）、「かはづ」

も二例用いられて（⑥⑦）、どちらも川の清浄を印象づける景である。

②が郷愁の表出である点には注意したい。出雲にあつて門部王は

千鳥の声を聴き望郷の念をかき立てられるのだが、当人が自覚的で

あるかどうかは別にして、その連想のありかたには現在する出雲の

地と思念の中にある佐保とを優劣で較べる意識が露わだ。「我が佐保川」の言い回しはただ詠作者在京時の居住地の証言にとどまらず、そこに帰すべき自己への満足感・誇りの主張を含む。⑦も何らかの事情で佐保を離れた者の述懐であり、回想される佐保川の美しい環境に陶醉するかのごとくである。佐保川周辺を他のどこよりも理想的な価値ある空間ととらえ、そこに帰属する自身を特権的な存在であると誇示する意識が、彼らになかったとは言えないだろう。大宰少弐石川朝臣足人が大伴旅人に問いかけて、

さすだけの大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君

(6・九五五)

とうたった心境はもちろん⑦に重なる。

こうした気分の発現は⑥にも著しい。按作益人が佐保の住人であることは確実であり、宴に招いた上司・佐為王は佐保の外に住まう人だったのだろう。詠作者当人は上司の予想外に早い罷宴を心から残念に思っているのだろうが、佐為王の耳にはこの歌は自慢にしか聞こえない。「未及日斜」の時刻に退出した心中をわたくしに邪推するなら、主人のことばの端々に感じられる佐保への偏愛に辟易したのではなかったか。

催される宴の頻度が佐保川への観察を濃やかにし、称賛の詠歌を累積させた。⑬は題詞にそれと明言しないけれども、佐保川辺に構えられた邸の宴に招かれて主人への敬慕を佐保川面の薄水に託したものととらえるとき理解が居きやすい。⑪の一風変わった興趣を促したのも宴の時空であったにちがいない。宴席のほど近くを流れる佐保川は越えてゆく地点であるよりはそこに身を置く至福を甘受するところであった。

#### 四 坂上郎女の見た風景

そもそも万葉集中に「佐保の内」という語が五度も用いられていることが象徴的である。うち家持作歌一首を除くとほかは作者名を伝えない歌ばかりだが、彼らは一様に充足感を抱いて佐保に暮らす人びとだったと確信できる。事情あつて他郷に身を置くと、佐保はいっそう理想化された姿で脳裏に浮かぶことになる。そうした「内」への連帯感、強固な帰属意識はいきおい「外」との厳格な区別を要請し、やがて外部を排除する心性を育むだろう。そういえば麻呂贈歌二四歌に「蒸し衾なごやが下」とうたつて暮らしぶりの高さをさり気なく誇る口ぶりがあった。「玉櫛」の語もそうだ。

坂上郎女は、藤原麻呂をそのような特権的地域の住人と位置づけ、そこから川を渡つて訪れる貴公子のごとく扱つて見せた。自らをあえて「外」の存在と装いつつ、揶揄や諧謔を弄びながら。しかし、その装いと諧謔が麻呂の求愛を拒み通す姿勢のあらわれであつたかという点、そうは思わない。あくまでもこの贈答を成立させるために選択された趣向と興味に過ぎず、郎女が麻呂との身分の差を悲観的に見積もっているということでもない。当の郎女が、

#### 大伴坂上郎女柳歌二首

我が背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも

(8・一四三三)

うち上る佐保の川原の青柳は今春へとなりにけるかも

(8・一四三三)〈前掲〉

を詠作しているのであり、「我が背子」を誰と特定しなくても大伴の氏人に相違なく、坂上里に居を構えるとはいえ彼女自身が本来は

佐保の住民であつた。その余裕があればこそ、執拗なまでに境界の佐保川をうたい、麻呂に川渡りを強いたのだと見られよう。

献 天皇歌一首 大伴坂上郎女在佐保宅作也

あしひきの山にし居れば風流なみ我がするわざをとがめたまふな

(4・七二二)

右を参照するまでもなく、郎女の謙りはそのまま矜持でもある。「打橋」といい「岸のつかさの柴」といい、おそらく現地にもありもしない情景を麻呂に提示して見せるのだつたが、実際に彼女の目に映る佐保川は、いつも変わらぬ穏やかな流れ、長らく慣れ親しんだ安らぎを覚える水辺、いわばあたりまえの風景でしかなかっただろう。そんな身近な川を渡り毎夕黒馬が訪れる非現実の光景を思い描いて、郎女はおもしろくてしかたなかったにちがいない。六麓荘からやってきた黒塗りのロールスロイスが、我が家の前でずつと停まったら、それはそれは痛快であるように。



佐保川

注

- 1 神堀忍氏は当該歌群を「養老五年六月下旬に京職大夫に就任した麻呂が、その秋に坂上郎女に求婚した折の一連のもの」と解し、この「娉」はあくまでも求婚であつて婚姻関係の成立を示すものではないという(大伴家持と坂上大嬢―その年齢推定の試み―『萬葉集研究』第二集、塙書房、昭和48年)。
- 2 豊田八十代『萬葉集新釈』
- 3 石井庄司「万葉集卷六の「西宅」について」(『文学』第一卷第八号、昭和8年9月)
- 4 土屋文明『萬葉集私注』
- 5 川口常孝氏『大伴家持』(桜楓社、昭和51年)、その第二章第二節「佐保の宅」と「西の宅」、および第三節「大伴諸宅」。
- 6 注3石井論に「菰川が暗峠道と交叉するほとりに、三町ばかりの廣さを持つ「田村川」と稱せられる地區」のあることへの言及がある。
- 7 「関西電力奈良変電所」は現在「関西電力奈良営業所」と改称されている。なお「田村里」については『続日本紀』孝謙天皇天平勝宝四年四月乙酉条に「是の夕、天皇、大納言藤原朝臣仲麿が田村の第に還御します」とあるにも注意される。岩波新大系『続日本紀三』補注に「平城京の左京四条二坊の東半(九―十六坪)に推定されている」とある。
- 8 屋敷頼雄「大伴坂上郎女」(『萬葉集講座第一卷』春陽堂、昭和8年)
- 9 注3石井論文
- 10 奈良文化財研究所『平城京木簡三』(平成18年)、渡辺晃宏氏『平城京一三〇〇年全検証』(柏書房、平成22年)
- 11 注5川口氏著、「佐保の宅」と「西の宅」。

12 関本みや子氏「万葉後期贈答歌の様相―藤原麻呂・坂上郎女贈答歌群をめぐって―」(『上代文学』第五十号、昭和58年4月)

13 真下厚氏「藤原麻呂・大伴坂上郎女贈答歌の生成」(『万葉歌生成論』三  
弥井書店、平成16年)

14 江富範子氏「大伴坂上郎女序論―麻呂との贈答歌をめぐって―」『女子  
大國文』第一〇九号、平成3年6月)

15 土地価格相場が分かる土地代データ <http://www.tochidainfo> による。検  
索は平成28年10月。

16 本文中に引用した歌を除く「佐保の内」の例は次のとおり。うち前者は「四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌」と題する長歌に対する反歌である。

梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに

(6・九四九)

佐保の内ゆあらしの風の吹きぬれば帰りは知らに嘆く夜そ多き

(11・二六七七)

17 そういうのを「さりげ自慢」と呼ぶのだと、ことし学生から学んだ。類似する表現が古事記上巻、須勢理毘売命の歌に見える。

…綾垣の ふはやが下に 蚕袈 和こやが下に 袴袈 騒ぐが下に

沫雪の 若やる胸を 栲綱の 白き腕 そ叩き 叩き愛がり 真玉手

玉手差し枕き 股長に 寝をし寝せ…

「蒸し袈なごや」が上等の夜具であることは明白である。

付記 平成二十八年度美夫君志会十二月例会「万葉への招待」(於・中京大学)  
で講話した内容を原稿にしたものです。

(かげやま・ひさゆき 本学教授)